

第6章

終わりに

第6章 終わりに ～正解がない中、“成功”を創造する～

行政は、地域に医療・介護・福祉を提供していく責任を持っている。もちろん医療資源・介護資源は、現状においても、地域によって大きな差がある。しかし、住民がいる以上、住民とともに創る「地域福祉サービス」はあるはずであるし、また、医療も介護も、行政が本気になればサービスを創造することはできる。地域の中でケアを提供すること（care in the community）だけではなく、地域自らがケアを創造し使いこなしつつ、コミュニティを育てていくべきなのである（care by the community、care for the community）。

つまり、地域・地域の特性にあった、又は身の丈にあったとでも言うべき、「地域ケア」があると言える。地域資源が無いから地域ケアが進まないという主張は、自分たちが動かない理由を、地域資源が無いことを言い訳にしているにすぎないのではないかな。

地域の医療・介護・福祉は、国からは残念ながら見えない。地域のあり方は、地域で考え、そして、具体的行動を起こすことが大事である。それが超高齢社会でも住みやすい地域を創るのである。国は、残念ながら、“制度”“仕組み”しか創れないのである。制度や仕組みを生かすも殺すも、地域次第である。

国が悪いとばかり言っても意味はない。批判は何も産み出さない。批判の前に、まずは地域で具体的行動を起こそうではないか。その上で、制度的対応があるのであれば、建設的な提言を行っていかうではないか。

「地域ケアの実現」。この実現が簡単なことだといった幻想は持っていないが、決して実現困難なユートピアでもないと考える。行政機関、住民、医療・介護・福祉の関係者の意識が変わり、具体的行動に結びついていけば、必ずや実現可能である。

これまで変わらなかったものほど、変わるときには大きく変わるものである。しかし、大きく変えることは、その字のごとく、「大変」なことである。大変なことではあるが、地域ケアの実現に向けて、地域で具体的行動を起こそうではないか。あっと驚くウルトラCのような近道はない。それぞれのやっていること、やるべきことをもう一歩ずつ進めていくことだけが次の展望を可能にするのであろう。

誰もが経験したことの無い超高齢社会である。団塊の世代が、2025年には75歳以上となり、2035年には85歳以上となる。2035年には、ここ三重県で、実に5人に1人が75歳以上の後期高齢者となる。一方、今この国で産声を上げている子どもたちが2025年以降、生産年齢人口となっていく、2035年には社会の中核を担うことになる。そのとき、この世代は、どれだけの希望を持って、社会に足を踏み出すことができるだろうか。間違っても、この世代が、超高齢社会の不安から抜け出せないようなことがあってはならない。

これまでは我が国より高齢化が進んだ国があり、その国の前例を一つの尺度にしながら、目指すべき姿を描き、それにキャッチアップすることで済んだ。これからは人類が経験したことの無い未曾有の体験をしていくことになる。このような中、どのような地域社会を創っていくか、そこに「これが正解」といった明確な答えはないし、ましてや国が「これが正解」と示すこともあり得ない。つまり、正解がない、正解が示されない中で、地域ごとに「成功」を創造することが求められているのである。